



みどころ

トランプ前政権下で保守化が進んだアメリカの連邦最高裁判所は、2022 年 6 月 24 日「ロー対ウェイド判決」を破棄し、人工妊娠中絶の権利は各州の権限に委ねることにしたが、1973 年の「ロー対ウェイド判決」とは？

本作の舞台は 1968 年のシカゴ。そこでは人工妊娠中絶は禁止されていたから、弁護士の妻で、2 人目を妊娠中だが、母体の維持のために中絶を選択せざるを得ないヒロインの取るべき選択肢は？

「コール・ジェーン」は本当に妊娠で困った女性を助けるための慈善団体なの？その運営は誰がどのように？施術は誰が？費用は How much？『ヴェラ・ドレイク』(04 年) は名作中の名作だが、それと対比されるべき本作も必見！

その実態にビックリなら、ヒロインの“目覚め”ぶりにビックリ！しかし、**「コール・ジェーン」への、あなたの賛否は？**

■妊娠？助けが必要？ジェーンに電話を■

本作の原題は『Call Jane』だが、それだけでは何の映画かサッパリ分からない。しかし、邦題のように「女性たちの秘密の電話」というサブタイトルが付けば、なんとなくイメージが湧いてくる。そして、本作のイントロダクションに書いてある「名もなきヒロインたちが『女性への権利』のために立ち上がった感動の実話」「1960 年代、中絶が違法だったアメリカのシカゴで女性の権利を擁護し、ひたむきに闘う者たちがいた」の文字を読めば、「ああ、なるほど」と納得できる。本作は、中絶が禁止されていた 1960 年代後半から 70 年代初頭のアメリカで、推定 12,000 人の女性たちの中絶を手助けしたと言われている、実在した団体「コール・ジェーン」を描くものだ。

そう聞くと、私は人工妊娠中絶問題を真正面から扱った名作『ヴェラ・ドレイク』(04

年)『シネマ 8』335 頁)を思い出す。同作は 1950 年代のロンドンを舞台に、家政婦をして夫を支えながら 2 人の子供を育てている“ヴェラおばさん”が、必要に迫られて無償で若い娘さんたちの“人助け”をする物語だったが、さて本作は？

本作冒頭、弁護士の夫ウィル(クリス・メッシーナ)が共同経営者に昇格する夕食会に参加した妻のジョイ(エリザベス・バンクス)は、その帰り道で偶然、「ベトナム戦争反対！」を叫びながらデモ行進している若者たちに遭遇すると、デモ隊から聞いた「世界中が見ている」という言葉の中に何らかの変化を感じ取ることに・・・

■人工妊娠中絶は違法！母体は無視？■

裕福で誠実な夫ウィルと 15 歳の一人娘、シャーロット(グレイス・エドワーズ)の 3 人で何不自由ない生活を送っているジョイは、2 人目の子供を妊娠中だ。しかし、ある日「妊娠のために心臓が悪化しているので、唯一の治療法は妊娠を止めることだ」と告げられたから、ビックリ！そこで、ジョイはやむなく中絶を申し出たが、中絶が法的に認められていない 1968 年当時のシカゴでは、病院の責任者である男性たち全員が「中絶は反対！」と拒否してしまったからアレレ・・・？

「妊娠したまま助かる確率は 50%」と聞かされたジョイはそこで「母体はどうなってもいいの？」と叫んだが、残念ながらそれが当時の現実だった。そんなジョイがシカゴの街で「ヴェラおばさん」を探す中で偶然見つけたのが、「妊娠？助けが必要？コール・ジェーンに電話を」という張り紙だ。その電話番号に恐る恐る電話をしてみると・・・

■違法だが安全な中絶手術を提供！それが Call Jane？■

本作はフィリス・ナジーという女性監督の長編映画デビュー作だが、本作の誕生については、『ダラス・バイヤーズクラブ』(13 年)『シネマ 32』21 頁)のプロデューサーとして有名なロビー・ブレナーの尽力が大きかったらしい。そして、本作では、1960 年代のシカゴの街並みをリアルに再現した美術や衣装そして色彩へのこだわりが顕著だ。

本作で何よりも私が印象に残るのは、ジョイが乗る車の大きさだ。キャデラックに代表される“アメ車”は何といってもその大きさが特徴で、1950 年代のジェームス・ディーンが主演した『ジャイアンツ』(56 年)や、つい先日、4K リマスター版で上映された、シスターフット映画の名作、『テルマ&ルイズ 4K』(91 年)でもそんな車が印象的だった。また、私が大学に入学し、学生運動に励んでいた 1968 年当時のアメリカは、「ベトナム戦争反対！」のデモ行進の反面、巨大なキャデラックが街を疾走する姿が特徴だった。

「コール・ジェーン」を運営しているのは、①車でジョイを迎えに来てくれた黒人女性のグウェン(ウンミ・モサク)のほか、②リーダーで創立メンバーでもあるヴァージニア(シガニー・ウィーパー)、③グウェンから「若いけれども優秀な医師」と紹介され、実際にジョイの中絶手術を施術した医師のディーン(コリー・マイケル・スミス)を中心とする多くのメンバーだったが、その実態は？1960 年代後半から 70 年代初頭にかけて、「コール・ジェーン」は推定 12,000 人の女性の命を救ったと言われているし、「コール・ジェ

ーン」の献身的な活動(?)は1973年の「ロー対ウェイド判決」によって実を結んだと言われているが、さてその実態は?

■□■富裕な家庭の妻から「女性の権利」のための女闘士に?■□■

私は大学時代に、同棲していた友人カップルの人工妊娠中絶の協力をしたことがあるが、アメリカのような「宗教上の問題」のない日本では、事実上人工妊娠中絶は自由だった。しかし、1973年に「ロー対ウェイド判決」が出るまでのアメリカでは、人工妊娠中絶は明確に違法だったから、それを組織的に援助し、1人につき600ドルもの費用を請求する「コール・ジェーン」の活動は明らかに違法だった。施術がうまくできなかった患者や料金に不満がある患者、さらには関係者の誰かから当局に密告されたら、「コール・ジェーン」は“たちまちアウト”になってしまうはずだ。したがって、本作では、滅多に見ることのできないジョイの中絶手術の実態と、違法な「コール・ジェーン」の組織をいかに守り抜くかというヴァージニアたちの努力の数々をしっかりと確認したい。

他方、そんな「コール・ジェーン」のおかげで無事中絶手術を終えて心臓への負担も軽減し、夫と娘には「残念ながら流産してしまった」と報告したことで万事コトなきを得たジョイだったが、3日後にグウェンから安否確認の電話の中で、新たに中絶を受ける女性を車で迎えに行き、医師のもとに送り届けてほしいと頼まれると・・・?車の提供や臨時の運転手くらいは仕方ないだろう。しかし、ディーン医師のもとで看護師のようなお手伝いをしたり、支援団体のミーティングに参加したり、600ドルの中絶資金を支払えない人への対応をめぐって議論しているうち、次第にジョイは「コール・ジェーン」の活動にのめり込んでいくことに・・・。そのうえ、ジョイはもともと行動力があるしカンも鋭いから、ある日ディーンの出身大学で彼の医師としての経歴を調べてみると、案の定・・・?そこでジョイが取った“戦法”とは?

本作は、そんな中盤から、弁護士の私ですら全く想定できない展開になっていくので、それに注目。それにしても、人工妊娠中絶の手術って、ちょっと医学書を勉強し、ちょっと練習をすれば誰でもジョイのように簡単にマスターできるの?それはおかしいのでは・・・?『ヴェラ・ドレイク』は中盤からは、ある想定できる展開になっていったが、本作は後半からはあっと驚く展開の連続になっていくのでそれに注目!

■□■隣人の女性ラナの存在と役割に疑問あり!■□■

本作は、“中絶権利擁護派”と“女性の権利擁護派”の面々が、トランプ政権下で、1973年の「ロー対ウェイド判決」が変更される可能性を憂える中で企画されたい。本作の主人公ジョイは弁護士の妻としてリッチな生活を享受している女性だが、そんなジョイがなぜ“女性の権利を巡る女闘士”に変身したの?そんなテーマの映画を制作すればきっと面白いだろうし、今の時代に有益なはずだ。それがプロデューサーや脚本家の狙いだったため、本作導入部ではジョイの隣人の女性ラナを登場させ、「コール・ジェーン」がジョイの生活の中に入り込んできた理由を、ラナとの会話の中で描いている。それはそれで悪く

はないが、本作中盤からウィルの悩みを聞くシークエンスの中でラナの存在感が俄然目立ってくるので、それに注目。ウィルにとって、ジョイは自分を支えてくれるベストパートナー！そう思っていたのに、家族には美術講座に通っていると嘘をつき、食事は冷凍食品で済まし、「コール・ジェーン」の支援活動に没頭していたとは！そんなウィルの悔しい気持ちにはよくわかるが、そうかといってラナにその悩みを打ち明けている中で、あんなハプニング（？）が起きるとは！いくら何でもこの展開は無用だったのでは・・・？

■□■警察もビックリ！夫も娘もビックリ！その結末は？■□■

「コール・ジェーン」の存在とその活動をどう評価するのが難しい。ジョイをはじめ推定 12,000 人の女性を人工妊娠中絶で助けたという功績は認められるし、そこで死亡事故が一件もなかったという実績も認められるが、それはあくまで“結果論”に過ぎないのでは？人工妊娠中絶手術だけなら順調にいけば約 20 分で終わるそうだが、もしそこで、例えば感染症の発生という想定外の事態が発生したら、どうするの？医師免許を持っていないジョイのような女性がそんな事態に対応できるはずはない。チャン・ツィイーが主演した『ジャスミンの花開く（茉莉花開／Jasmine Women）』（04 年）（『シネマ 34』192 頁）では、一人で自分自身の出産を成功させるクライマックスのシーンが強烈だったが、出産は一人でできても、人工妊娠中絶は一人では絶対無理で、医師の施術が不可欠だ。「コール・ジェーン」が“摘発”されたのは、誰かの密告のせい？それは本作では明かされないが、本作ラストに向けては「コール・ジェーン」が組織ごと当局の“摘発”を受ける展開になっていくので、それに注目！

ジョイの夫のウィルは刑事事件専門の優秀な弁護士で、共同経営者に昇格したところだが、ジョイがそんな活動をしていたと知ってビックリ！それは、初潮を迎え、妊娠・出産の生理をはじめて知った 15 歳の娘のシャーロットも同じだが、さて本作に見るジョイたち家族の行方は？普通に考えれば、ジョイは執行猶予付きの有罪となり、夫婦は離婚、そして家族はバラバラに！そんな展開が想定されるが、さて本作は？

■□■破棄された「ロー対ウェイド判決」のその後の展開は？■□■

2020 年 11 月の大統領選挙でトランプ政権が終わり、バイデン政権に移行したものの、来たるべき 2024 年 11 月の大統領選挙では“もしトラ”の可能性が高いとされている。もちろん 2022 年 6 月 24 日に、1973 年の「ロー対ウェイド判決」が破棄されたのは、トランプ政権下で米国連邦最高裁の保守化が進んだためだ。すると、2024 年 11 月に“もしトラ”が現実化したら、再び全米が人工妊娠中絶禁止の国になってしまうの？そう思っていると、2024 年 4 月 14 日付新聞各紙は、トランプ前大統領が 4 月 8 日、「人工妊娠中絶の規制の是非は各州が決めるべきだ」との見解を表明し「全米での一律禁止には言及しなかった」と報じた。これは、11 月の大統領選挙で「争点」に浮上するはずの中絶問題で穏健な姿勢を示したためだが、さて現実はどう展開していくのだろうか？きちんと注目していきたい。

2024（令和 6）年 4 月 10 日記